

※2017日本教育新聞のコラムに武蔵野東幼稚園の話題が掲載されました

続 保育のこころもち

▶93 保育観共有のスタート地点



秋田 喜代美
東京大学大学院教授

新学期がスタートする4月。入園・進級した子どもたちを迎え入れるため、保育室がきれいに飾り付けられる。その準備のために、時間をかける保育者や園も多い。

ある園では、年長児が3月の卒園に向けて、部屋を彩る飾りを自分たちで作る。さら

絵の花飾りも作られた。

この園では以前、入園・進級のための壁面や室内の飾り付けを、各クラスとも保育者が準備していた。しかし、今は、子どもたちも一緒に手作りで飾り付けをしている。

園長先生は、「見栄えだけを考えたら、保育者の準備し

る。しかし、そうすれば入園準備の時間が節約でき、他のことに時間を使えること、子どもが次の子のことを思って作るプロセスにこそ保育としての価値があることを保育者に伝えている。

このことは、保護者にも説明する。そうすることで、結

思いとプロセスの重要性を具体的事例で伝える

に、それを4月に年長になる園児が進級する際の飾りとしても使う。その様子を拝見する機会に恵まれた。

花紙で花を作っていると、色とりどりの切れ端が出る。

「桜の花びらみたいだね」という発言から、「貼り絵みたいにできるかな」とみんなで切れ端を集め、きれいな貼り

た飾りの方がそろっていてきれいなのは当然。でも、年上の子が次の年下の子のことを考えて飾りを作ること、子どもたちが園生活を自らの手でつくって自立していくとはこういうことと、保護者に伝えている」と話してくださった。

自分で飾りを作りたい保育者がいれば、それも認めてい

果や見た目の出来より、子どもの思いとプロセスをより大事にする保育観を、4月当初から理解してもらおう。

具体的なことを通して保護者に保育を理解してもらおう大切さを、この園長先生の姿から学ばせてもらった。

次回は5月1・8日付掲載